

令和元年度東京国立博物館連続講座

「出雲と大和」

日時：令和2年1月24日（金）・1月25日（土） 13:30-17:00

会場：東京国立博物館 平成館大講堂

■1月24日（金）

第1講 13:30-14:30

「弥生絵画を鑑賞する—近畿と山陰地方の弥生絵画の比較を通して—」

講師：橋本 裕行（奈良県立橿原考古学研究所 企画部企画課長）

第2講 14:45-15:45

「最新技術で眺める大和の古墳」

講師：西藤 清秀（奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー）

第3講 16:00-17:00

「仏教の伝来と仏像の造像」

講師：皿井 舞（東京国立博物館 平常展調整室長）

■1月25日（土）

第4講 13:30-14:30

「古代出雲における青銅器の特質」

講師：増田 浩太（島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員）

第5講 14:45-15:45

「日本海文化としての出雲の古墳時代—考古学から見た地域王国論—」

講師：河野 一隆（東京国立博物館 調査研究課長）

第6講 16:00-17:00

「出雲大社巨大本殿と古代出雲世界」

講師：松尾 充晶（島根県古代文化センター 専門研究員）

受講証について

受付時にお渡ししました受講証は、2日目にも必ずお持ちいただき、
ご入館・大講堂入場時にご提示ください。

連続講座「出雲と大和」

出雲と大和は、古代の日本の成立を語るうえで欠くことのできない存在です。出雲において悠久の神々や祭祀を通して国の源流を、大和においては天皇を中心とする力強い権威の軌跡をたどることができ、両者が複合的に織り成されて国の形がつくられていったことが分かります。

今年の連続講座では、考古学や日本彫刻の最新の成果をもとに、古代の出雲と大和に光を当て、古代日本の成立やその特性に迫ります。

講師プロフィール

1月24日(金)

■第1講 13:30-14:30

「弥生絵画を鑑賞するー近畿と山陰地方の弥生絵画の比較を通してー」

奈良県立橿原考古学研究所 企画部企画課長 橋本 裕行(はしもと ひろゆき)

専門は日本および東アジアの考古学。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長を経て2016年より現職。代表的な著作は、「弥生時代の造形・文様・絵画」(『日本美術全集1 縄文・弥生・古墳時代 日本美術創世記』小学館、2015年)、「弥生絵画に内在する象徴性について」(『日本美術全集 第1巻 原始の造形』講談社、1994年)。

■第2講 14:45-15:45

「最新技術で眺める大和の古墳」

奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー 西藤 清秀(さいとう きよひで)

専門は西アジアの墓制。

奈良県立考古学研究所副所長を経て2013年より現職。代表的な著書・論文には、共著編2017『世界遺産 パルミラ -破壊の現場から-』(雄山閣2017年)、「3次元航空レーザー測量とその成果」(『季刊考古学』巻140 p.54-57 雄山閣2017年)、共著「高精度航空測量技術による3次元データの可視化」(『考古学と自然科学』第69号 77-94 日本文化財科学会 2015年)、「箸墓古墳・西殿塚古墳の墳丘の段構成について」(『奈良県立橿原考古学研究所75周年記念論集』41-51、八木書店 2014年)など。

■第3講 16:00-17:00

「仏教の伝来と仏像の造像」

東京国立博物館 平常展調整室長 皿井 舞(さらい まい)

専門は日本彫刻史。

東京文化財研究所主任研究員、東京国立博物館主任研究員を経て、2019年より現職。近著は、『天皇の美術史1 古代国家と仏教美術 奈良・平安時代』(吉川弘文館、2017年)。

1月25日(土)

■第4講 13:30-14:30

「古代出雲における青銅器の特質」

島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員 増田 浩太(ますだ こうた)

専門は弥生時代の青銅器。

平成11年(1999)に島根県職員として採用され文化財行政に携わる。国宝荒神谷・加茂岩倉青銅器群の管理・調査を担当。平成30年より現職。代表的な著書は、『志谷奥遺跡出土青銅器群の研究』((共著)島根県古代文化センター、2017年)、「再考 出雲の青銅器文化」(『古代出雲ゼミナールV』島根県・島根県教育委員会、2018年)、「青銅祭器の自然科学分析」(『青銅器の考古学と自然科学』国立歴史民俗博物館、2018年)。

■第5講 14:45-15:45

「日本海文化としての出雲の古墳時代—考古学から見た地域王国論—」

東京国立博物館 調査研究課長 河野 一隆(かわの かずたか)

専門は考古学。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターで発掘調査に従事後、九州国立博物館の開館と展示企画、資料管理、装飾古墳デジタルアーカイブを推進。2018年より現職。代表的な著書は、河野一隆「石製模造品」(『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館、2002年)、「装飾古墳とはなにか?」(『最新技術でよみがえる九州の装飾古墳』東京書籍、2015年)。

■第6講 16:00-17:00

「出雲大社巨大本殿と古代出雲世界」

島根県古代文化センター 専門研究員 松尾 充晶(まつお みつあき)

専門は考古学。

島根県立古代出雲歴史博物館学芸員等を経て2017年より現職。主な著作は、「古代の祭祀空間」(『史林』第98巻第1号、史学研究会、2015年)、「古代神社の立地環境と構造」(『古代祭祀と地域社会』、島根県古代文化センター、2016年)、「出雲の古代祭祀と神・社」(『古代文学と隣接諸学7 古代の信仰・祭祀』竹林舎、2018年)。

第1講「弥生絵画を鑑賞する—近畿と山陰地方の弥生絵画の比較を通して—」

奈良県立橿原考古学研究所 企画部企画課長
橋本 裕行

I. 弥生絵画の基礎知識

1. 弥生絵画の表現様式

体内充填技法；シカの胴部などに斜格子目文・単斜線文などを描き、面を表現する。

レントゲン画法（X画法・透視画法）；実際には見えない内部（内面）を透視したように描く。

多視点画（視点の移動）；複数の視点（方向）から見た姿・形を合成して一つの図像として描く。

多時点画（異時同図法・画題連鎖）；異なる時点を同じ絵の中に合成して描く。

展開画法；主に土器（壺）の頸部や胴部に複数の図像を並列して描く→物語性。

※児童画との比較研究から弥生絵画はイメージ画（レントゲン画・多視点画・多時点画等）と位置付けられる。

2. 弥生絵画の特徴

絵画土器の分布；南限：鹿児島県、東限：茨城県。

絵画土器の時期；出現期：北部九州で前期（Ⅰ期）新段階。鹿と鉤状文が組み合わさる。

盛行期：中期後葉（Ⅳ期）。中期中葉（Ⅲ期）の資料も増加。

図像の選択；描かれる図像は、意図的に選択されている。

土器絵画：シカ・建物・人・トリ・龍・船・サカナなど。

銅鐸絵画：シカ・トリ・人・サカナ・イノシシ・トンボ・カメ（スッポン）・カマキリ・トカゲ（イモリ）・クモなど（図1）。

木器絵画：シカ・サカナ・建物・船など。

図像出現の時間差；後期（Ⅴ期）に龍が出現。後期～古墳時代前期にかけて人面画が広範囲に出現。

構図；時空間を越えて共通する構図が存在する。

土器絵画ではシカと建物、シカと人、シカ・建物・人の組み合わせが多い。

図像の選択性・構図の共通性という特徴から、絵画の背景には共通の物語が存在した可能性が高い。

表現様式と技法；土器絵画の描き方に地域性がある。

絵画から記号へ；絵画の中には、表現が抽象化し記号へ変化するものがある。

絵画の背景；神話・伝説・世界観（宇宙観）などが秘められている。

II. 加茂岩倉遺跡出土銅鐸に描かれた図像（図2）

・Ⅱ2式；21号鐸B面鐸身横帯→シカ、37号鐸B面鈕→シカ ※21号鐸は兵庫県気比4号鐸他2例と同範。

・Ⅲ2式；10号鐸B面鈕→ウミガメ、29号鐸B面鈕→人面。

・Ⅲ2式～Ⅳ1式；18号鐸A・B面鐸身→トンボ、35号鐸B面鐸身→トンボ・A面鐸身→シカ・四足獣a、

23号鐸A面鐸身→シカ・四足獣a・B面鐸身→シカ・四足獣b。

※Ⅲ2式およびⅢ2式～Ⅳ1式に描かれた図像に、出雲の独自性（ウミガメ、人面、トンボ、四足獣a・b、四区袈裟襷文の一区画内をさらに上下左右の三区画に分割）が表現されている。

Ⅲ. 山陰地方の銅鐸絵画以外の弥生絵画

1. 島根県の絵画資料（図 3）

- ・ 10 遺跡 20 例。
- ・ 木器に描かれた 1 例以外は、すべて土器絵画。
- ・ 図像が明確なものはシカ（3 例）・サカナ（サメ）（1 例）。

2. 鳥取県の絵画資料（図 4）

- ・ 15 遺跡（＋出土地不明 1）59 例。 ※青谷上寺地遺跡出土品が飛び抜けて多い（31 例）。
- ・ 土器以外に木器・土玉・砥石・礫などにも描かれる。
- ・ 図像が明確なものは人（4 例）・建物（2 例）・船（3 例）・シカ（11 例）・トリ（2 例）サカナ（サメ）（13 例）。

Ⅳ. 山陰地方の弥生絵画の特色

1. 近畿地方の絵画との共通点

- ・ 物語性に富んだ絵→鳥取県角田遺跡（図 4-1）。
- ・ シカの絵が多い。
- ・ 盾と戈を持つ人物画→妻木晩田遺跡（図 4-3）・茶畑山道遺跡（図 4-4）。
- ・ 袴座遺跡（兵庫県豊岡市出石町）出土例と共通する船団画→鳥取県青谷上寺地遺跡（図 4-5）。

2. 近畿地方の絵画との相違点

- ・ キャンバスの多様性→様々な木器・土玉・武器形青銅器・礫。
- ・ サカナを描いた例が多いが、なかでもサメを描いたと思われる例がある→島根県白枝荒神遺跡（図 3-3）・鳥取県青谷上寺地遺跡（図 4-17・19）・出土地不明銅剣（図 4-23）。
- ・ キツネのような表現のシカ→鳥取県青谷上寺地遺跡（図 4-13・14）。
- ・ ヒツジのような絵→鳥取県青谷上寺地遺跡（図 4-14）。
- ・ 現在確認されている唯一のウミガメの絵→加茂岩倉遺跡出土 10 号鐸 B 面鈕（図 2）。
- ・ 土器絵画に先行する人面画→加茂岩倉遺跡出土 29 号鐸 B 面鈕（図 2）。
- ・ 四区袈裟襷文の一區画内をさらに上下左右の三区画に分割して図像を配置→加茂岩倉遺跡出土 23 号鐸 A・B 面鐸身、35 号鐸 A 面鐸身（図 2）。

Ⅴ. まとめ

1. 近畿地方の絵画との共通点の背景

- ・ II2 式絵画銅鐸（島根県加茂岩倉遺跡 21 号鐸・37 号鐸、鳥取県泊銅鐸）の取得とともに、近畿地方で流布していた儀礼および物語（神話）が伝播。

2. 近畿地方の絵画との相違点の背景

- ・ 伝播した儀礼または物語（神話）に関わる図像を、地元の身近な被写体（建物・生き物）などに置換。
- ・ 単純な描画技術の拙さ。
- ・ 在地に流布していた物語または神話を絵で表現。

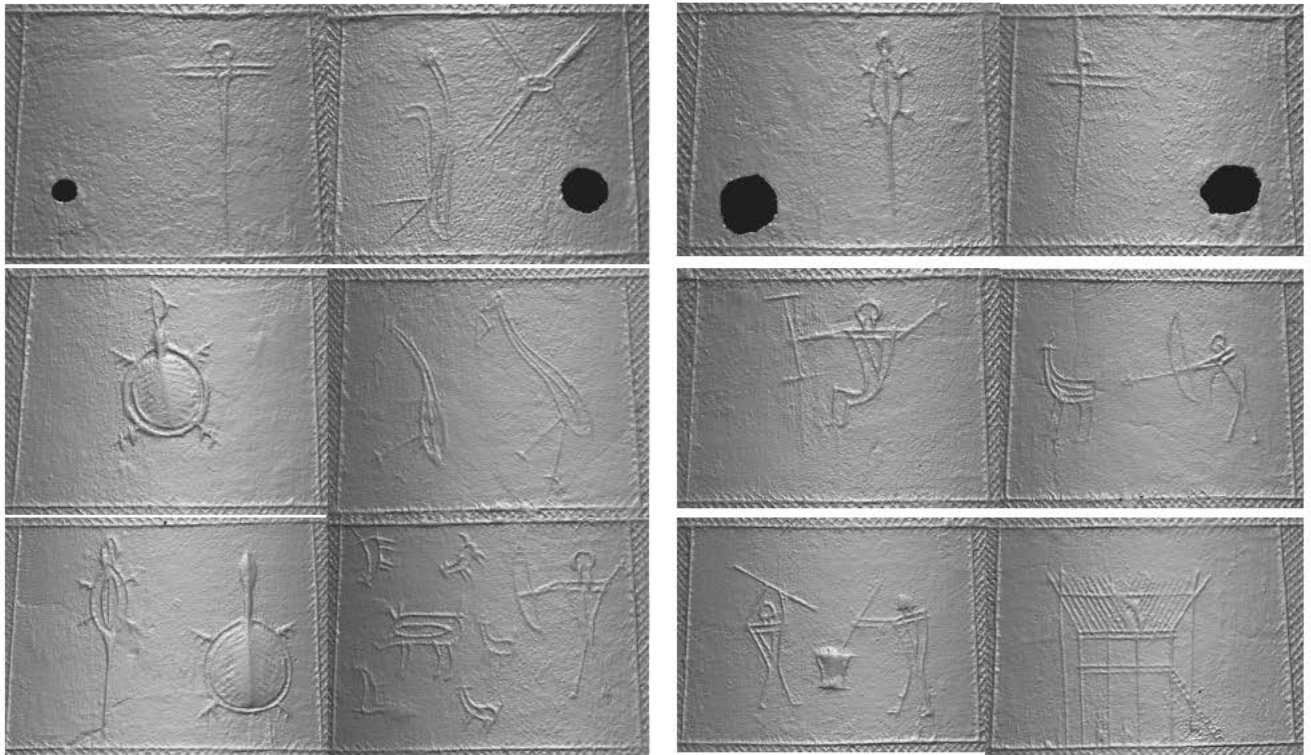


図1 伝香川県出土銅鐸に描かれた図像（3D画像：東京国立博物館提供）（縮尺不同）

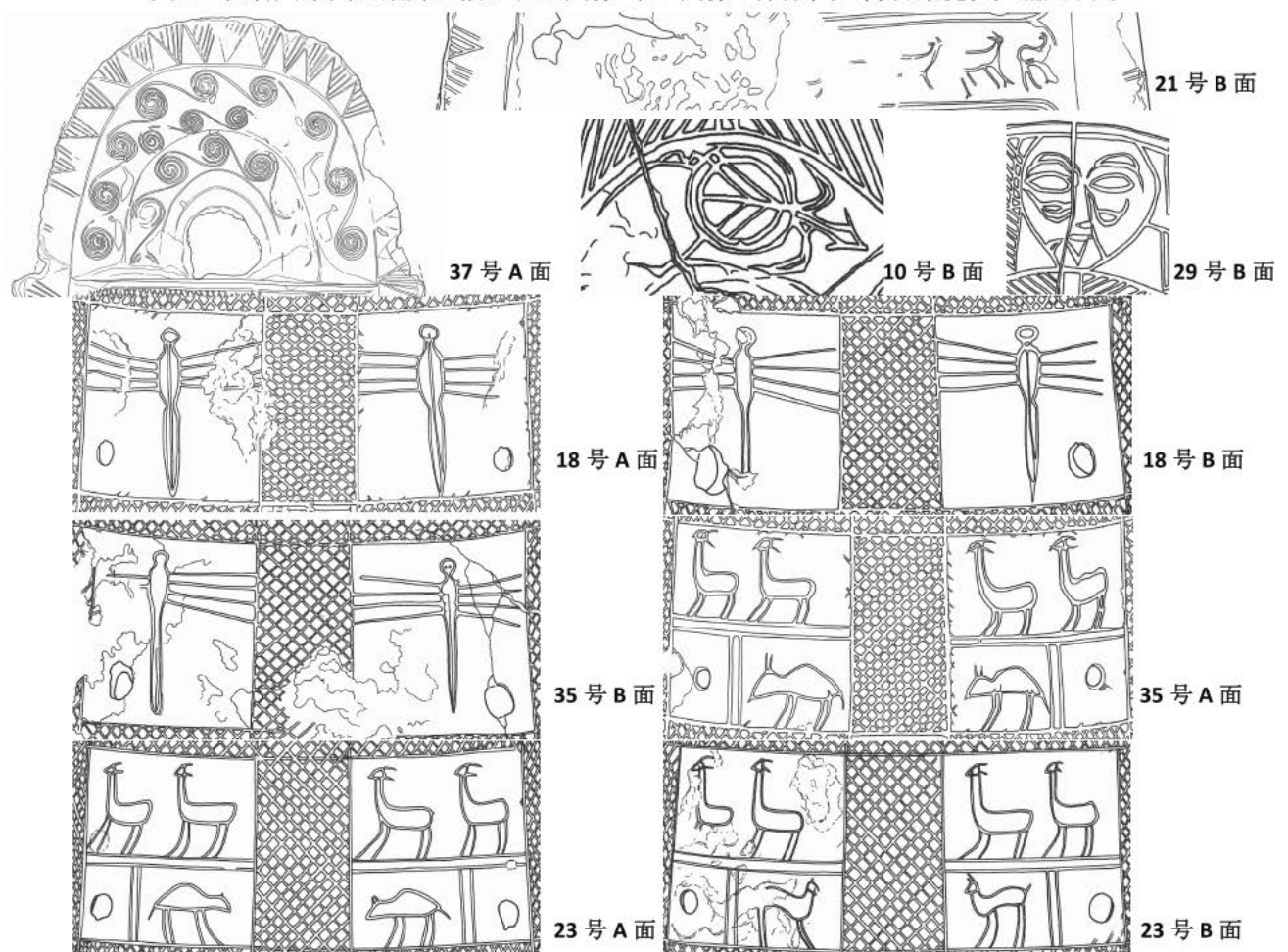


図2 島根県加茂岩倉遺跡出土銅鐸に描かれた図像（島根県教委 2002 年から改変）（縮尺不同）



図3 島根県の弥生絵画 (1: 中野清水遺跡、2: 美談神社遺跡、3: 白枝荒神遺跡)

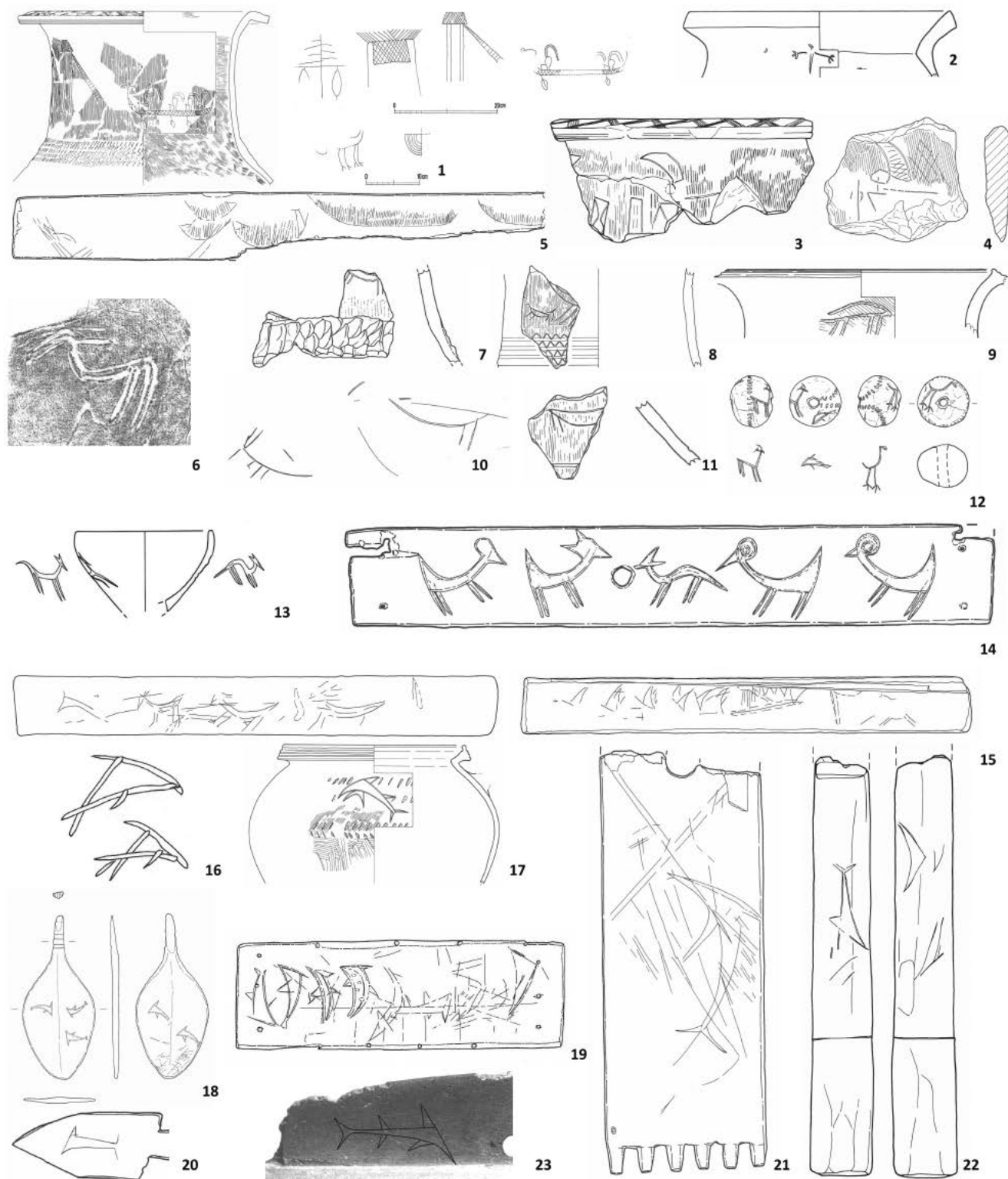


図4 鳥取県の弥生絵画 (1: 角田遺跡、2・5・9・12~15・17~22: 青谷上寺地遺跡、3: 妻木晩田遺跡、4・16: 茶畑山道遺跡、6: 名和飛田遺跡、7・10: 梅田萱峯遺跡、8: 大谷遺跡、11: 目久美遺跡、23: 鳥取県博蔵/出土地不明) (縮尺不同)

第2講「最新技術で眺める大和の古墳」

奈良県立橿原考古学研究所 技術アドバイザー
西藤 清秀

1. はじめに

最近、考古学の分野における最新技術の応用には目を見張るものがある。特に3次元レーザー計測や写真画像の加工技術は、遺跡や遺物を研究する上でなくてはならない手法である。これらは、文化財・文化遺産への理解を深め、それらを次世代に継承するツールとして重要な位置を占めている。また、昨今の自然災害や紛争等における文化財・文化遺産の破損や破壊に対しても3次元レーザー計測による記録は、それらの復興・再建・再現には欠かせないものとなっている。今後、その活用の用途は、さらに広がると考えられ、本講座では、上記手法を用いて、大和の古墳を眺めることにする。

2. コナベ古墳

コナベ古墳は、奈良県奈良市法華寺町に所在し、小那辺陵墓参考地として宮内庁に管理されている。この古墳は前方部を南に向けた前方後円墳であり、佐紀盾列古墳群の一部を構成し、佐紀古墳群の中で規模が100m以上ある10基の中の8番目にあたり、5世紀前半に築造されている。古墳の規模は全長約204m、後円部径約125m、同高約20m、前方部幅約129m、同高約17.5m、墳丘は3段築成、葺石・埴輪が存在し、東西両側くびれ部には造り出しがある。この古墳には濠が巡り、その外側には堤に沿って陪塚が築造されている。2009年秋に墳丘裾護岸工事の事前調査が実施され、埴輪列、葺石が確認された。

日本初の古墳の航空レーザー計測は、2009年12月古墳上高度650mから、ヘリコプターにより時速70kmで「井」字状に4方向から、12万発/秒で照射し、1㎡に平均10点以上のデータを取得した。その結果、コナベ古墳の墳丘および周辺の情報が予想以上入手できた。3次元計測は、後円部墳頂の小さな高まり、後円部墳頂への参詣道、西造り出しの方形の高まり、さらには古墳周辺情報としてコナベ古墳を取り囲むように段丘上に立地する陪塚等を新たなコナベ古墳像として提供してくれた（図1、2）。



図1 コナベ古墳空中オルソ写真



図2 コナベ古墳赤色立体地図

3. 新沢千塚古墳群

新沢千塚古墳群は、奈良盆地の南部、橿原市川西町、鳥屋町、北越智町に位置する小丘陵状に密集するように築造されている。この古墳群は、4 世紀後半から 6 世紀中頃の直径 10m から 15m の円墳を中心に前方後円墳や方墳を含む約 600 基あまりから構成されている（図 7）。この古墳群の中の 126 号墳からは遥か中東のササン朝ペルシャ製のガラス碗が出土している。

計測の結果、小規模古墳の密集する新沢千塚古墳群においても大規模古墳同様に明瞭な墳丘情報を入手でき、各古墳の立地を明確に視覚化できた。さらに新たな古墳や墳形も発見した。今後、今回得られた情報を加工することによって築造過程を順序立てて表現すれば、古墳築造に関わる空間利用を考える新たな局面を提供できる。また、今回の新沢千塚古墳群の赤色立体地図による付加的成果として新たな前方後円墳の発見と新たな墳形の確認がある（図 3, 4）。



図 3 新沢千塚古墳群空中写真オルソ写真



図 4 新沢千塚古墳群赤色立体地図

4. 箸墓古墳

箸墓古墳は、奈良盆地の東南部、桜井市箸中に位置し、纏向古墳群の中核をなし、現在宮内庁によって「倭迹迹日百襲姫命」の大市墓として管理されている。



図 5 箸墓古墳空中オルソ写真



図 6 箸墓古墳赤色立体地図

箸墓古墳の 3 次元航空計測の結果、箸墓古墳の段築に関して新たな資料を提供できることに

なった。大正年間の帝室林野局陸地測量部によって作成された測量図は、現在まで箸墓古墳の墳丘構造を考える大きな手掛かりとなっていたが、今回の 3 次元航空レーザー計測による赤色立体地図化は、この古墳の墳丘形態を先の 2 次元的な測量図以上に明白な墳丘の形状を提供してくれる結果となった（図 5, 6）。この古墳は、前方部を南西に向けた前方後円墳であり、3 世紀後半に築造された日本最古の古墳である。その規模は全長約 274m、後円部径約 79m、同高約 26m、前方部幅約 125m、同高約 17m である。この古墳には後円部で濠が巡っていることが確認されている。しかも、古墳は、後円部 5 段（墳頂の円丘部を含む）、前方部 3 段からなり、前面ばかりではなく側面にも段築が存在することが明らかになった。なお前方部の先端が極端な撥形を示すような結果は前方部の現墳丘の様相からは認められなかった。さらに後円部には従来の測量図では表れていなかった環状の高まりが巡っていることが明らかになった。しかしこの施設の時期・性格は明白ではない。また、箸墓と規模は異なるが、同企画で築造された京都市向日市五塚原古墳が箸墓の 1/3 の規模で 築造されていることの確証も得た。

5. 石光山古墳群

石光山古墳群は、西松本古墳群の丘陵の北側の丘陵に存在する 100 基余りからなる古墳群である。1972 年（昭和 47 年）と 1974 年の 2 次にわたって大規模な住宅開発に伴う発掘調査が実施された。1974 年以降、丘陵西側半分が住宅化され、現在は古墳が存在した面影はない（図 7）。そのため 1948 年の米軍空中写真を 3 次元画像にしたところ、消滅した古墳一基一基の位置を明確に確認することができた（図 8）。

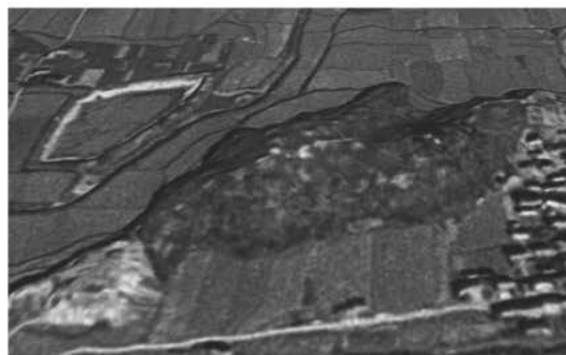


図 7 現況の石光山古墳群（樹相部が古墳群東半部）

図 8 1948 年撮影空中写真を 3 次元画像化した石光山古墳群

Google Earth より

6. 小山田古墳

小山田古墳は、2016 年学校教室棟改築事業に伴う調査により発見された新たな飛鳥時代の古墳であり、一辺 70m を超える方墳である。それ以後継続的にこの古墳の埋葬施設や墳丘に関する情報入手のために調査が行なわれ、石室の存在が明らかとなった。しかしながら墳丘に関する情報はさほど得られていない。この古墳が立地する場所は、早くに削平され、さらに 1966 年の奈良県立明日香養護学校の建設に伴い、さらなる削平が加えられ、古墳の存在は発掘調査まで全く知られていなかった（図 9）。そのためこの古墳の墳丘の遺存状況を確認するため米軍空中写真を 3 次元化し、1947・1948 年当時の古墳の墳丘を含めた周辺環境を再現した（図 10）。その

結果、墳丘規模は一辺約 76m と推定され、その成果は 2019 年の調査にも反映している。

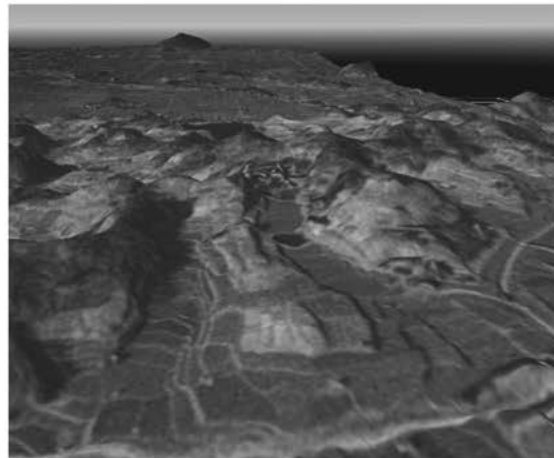


図 9 現況の小山田古墳とその周辺（中央の建物群）図 10 1948 年撮影空中写真を 3 次元画像化した小山田古墳
Google Earth より

7. おわりに

日本で最初の航空レーザーによる古墳の計測を 2009 年、㈱アジア航測の協力を得て開始してから 11 年が経過し、さまざまな意識のもと、大和の古墳の計測を行ない、古墳の形状、外部構造、施設、墳形企画に新たな情報を提供できた。また、米軍が第二次世界大戦後の 1940 年代に撮影した空中写真には現在消失した古墳・古墳群の姿が明瞭に映し出されており、その写真を活用し 3 次元化した結果、消失する前の古墳・古墳群とその周辺地形の新たな姿を再現することができた。

なお、古墳の航空レーザー計測はアジア航測株式会社との共同研究であり、古写真の 3 次元化に関する研究は、科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））平成 29 年度～平成 31 年度（課題番号 17K18520）による。

参考文献

- 西藤清秀・藤井紀綱 2010 「新時代を迎えた大型古墳測量」『日本文化財科学会第 27 回大会研究発表要旨集』 26-27 日本文化財科学会
- 西藤清秀・梅本康広 2013 「箸墓古墳・西殿塚古墳と向日丘陵の前期古墳」『日本考古学協会第 79 回総会・研究発表要旨』 48-49 共著、2013.5.25、日本考古学協会
- 西藤清秀 2014 「箸墓古墳・西殿塚古墳の墳丘の段構成について」『奈良県立橿原考古学研究所 75 周年記念論集』 41-51、八木書店
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1976 『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 31 冊、奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所 2015 『小山田遺跡第 5・6 次調査 現地説明会資料』
- 藤井紀綱、西藤清秀、千葉達朗 2015 「高精度航空測量技術による 3 次元データの可視化」『考古学と自然科学』第 69 号 77-94 日本文化財科学会
- 和田晴吾 1981 「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室

第3講「仏教の伝来と仏像の造像」

東京国立博物館 平常展調整室長
皿井 舞

1. 仏教の伝来と仏像の造像

◇仏教の日本への公伝について

552年伝來說

『日本書紀』欽明13年(552) 朝鮮半島百済国の聖明王から日本に仏教が伝えられた。

538年伝來說

『上宮聖徳法王帝説』(京都・知恩院所蔵) 欽明7年の戊午の年に伝えられたとする。

『元興寺縁起』(京都・醍醐寺所蔵)所収「元興寺縁起并流記資財帳」も同様

養老4年(720)に完成した『日本書紀』の仏教伝来記事には、中国・唐の長安3年(703)に漢訳された『金光明最勝王經』の文章が利用されており、『日本書紀』編纂段階で編者によって文章に手が加えられたか、まったく新しく作文されたかのどちらかだという指摘がされている。

552年という年次は末法思想にもとづいて設定されたという説が有力。

◇日本へもたらされた初期の仏像



【出品】東京国立博物館 如来および両脇侍立像

中尊は胸元に僧祇支(そうぎし)の結び目をのぞかせ、大衣の衣端を左腕から肩にはねかける形式などは、止利派の仏像とは異なっており、朝鮮半島渡来系の仏像である可能性が高い。

2. 飛鳥寺の建立と止利様式の広がり

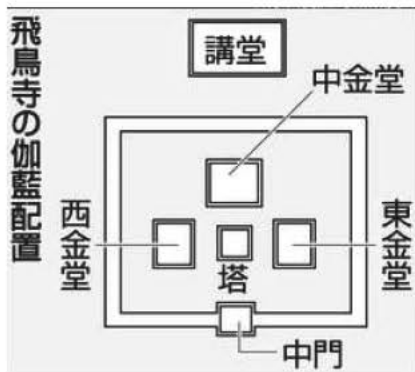
◇飛鳥寺の創建

崇峻元年(588)、蘇我氏によって本格的伽藍寺院である飛鳥寺の建立が始まる。

*一塔三金堂という独特の伽藍配置

伽藍の中核に塔があり、北側・東側・西側を囲むように3つの金堂が立ち並ぶ。

こうした伽藍配置は、平壤の清岩里廃寺など朝鮮半島の古代寺院に類例がある。



【参考】飛鳥寺の伽藍配置



【参考】飛鳥寺 銅造 釈迦如来坐像

通称飛鳥大仏の名前で親しまれている。

『日本書紀』推古 14 年(606)4月8日条「銅繡丈六仏像ともに作りおわりぬ。…丈六銅像を元興寺(注:飛鳥寺のこと)金堂にすえしむ」とある。『書紀』によると、飛鳥大仏は止利仏師(鞍作鳥・くらつくりのとり)が推古 14 年に完成したことになっており、また金堂に入れることができなかった大仏を堂内にみごとにおさめることができたという。ただしこのエピソードは『書紀』編纂時に潤色されたものらしく、『元興寺縁起』では飛鳥大仏の造像を推古 17 年(609)のこととしている。

◇寺院建立のひろがり

7世紀前半『日本書紀』推古 32 年(624) 日本に 46 の寺院があったと伝える。7 世紀後半までに寺院の建立は全国的に広がり、その数は 545 にまで増加したという。

3. 遣唐使派遣の開始と中国・初唐様式の受容



【出品】奈良・石位寺 浮彫伝薬師三尊像

◇中国・初唐様式の完成

唐の高僧 玄奘三蔵がインド求法の旅から中国唐の都である長安にもどるのが 645 年。
いっきにインド風の成熟した肉体表現などが仏像様式に取り入れられる。

遣唐使の派遣

舒明2年(630)	8月	第1次遣唐使派遣
白雉4年(653)	5月	第2次遣唐使派遣
白雉5年(654)	2月	第3次遣唐使派遣
同年	7月	第2次遣唐使帰国
斉明元年(655)	8月	第3次遣唐使帰国
斉明5年(659)	7月	第4次遣唐使派遣
斉明7年(661)	5月	第4次遣唐使帰国



【参考】東京国立博物館 三尊塼仏

塼仏とは、型に粘土を押し当てて、浮彫状に尊像をあらわし、焼成したあとに彩色や金箔をほどこして完成させたタイル状の仏像のこと。中国では玄奘がインド様式を伝えるメディアとして作成し、日本へは中国から多数もたらされたと考えられている。

4. 鎮護国家の仏像

7世紀末 天武天皇から持統天皇朝にかけて

日本は中国の政治制度を取り入れ、国号も倭から日本へとあらためた。中国風の都城である藤原京を完成させる。

宗教政策としては、日本の宗教的基盤を仏教と神祇祭祀の2つを両輪とする方針を明確にし、具体策を実施。寺院の建立、仏像の造立、仏画の制作、法会の開催、写経事業、僧尼制度の創出など。

▼国家儀礼として、金経明経齋会を中央と地方の両方で実施。

▼中国の制度にならって、国家が僧尼の出家を認める制度を創始し、1年間に10人の出家を認めた。

▼奈良時代・天平6年(734)には、『法華経』と『金光明最勝王経』が国に認められた僧尼になるための必修経典として定められた。

第4講「古代出雲における青銅器の特質」

島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員
増田 浩太

1. 古代出雲と青銅器

①古代出雲のイメージは如何にしてつくられたか

- ・ 二大勢力（銅鐸文化圏と銅鉾銅剣文化圏）の対峙
和辻哲郎 1939『日本古代文化』岩波書店

↓

- ・ 荒神谷遺跡 1984・加茂岩倉遺跡 1996 発見により多数の青銅器の存在が明らかに

↓

- ・ 古代出雲は「青銅器のクニ」、「大きな勢力」、「第三の勢力」

＊和辻は、二大勢力の対峙そのものを語りたかったわけではない。

（神武東征の根拠としたかった）

＊和辻は、むしろ朝鮮半島から近畿に至る「門戸」として山陰（出雲）を捉えていた。

＊教科書を書き換えるといわれながら、大枠では変わっていないという現実。

＊後談「いち早く青銅器祭祀をやめ、墓上（四隅突出型墳丘墓）祭祀」に転換」の提唱。

②出雲の青銅器とその特徴

- ・ 出土遺跡数は限られる。
→そもそも青銅器祭祀が盛んだったのか？
- ・ 武器形青銅器と銅鐸が混在する。
→ただし、武器形青銅器のうち銅矛・銅戈はほとんどない（＝定着していない）
北部九州においては 銅剣<銅戈<銅矛 という格付けが存在
- ・ 新しいタイプの青銅器が存在しない。
→実際の使用期間が短い。
他に先駆けて青銅器祭祀を放棄した？
- ・ オリジナル青銅器の採用
→中細形銅剣C類
「銅剣」であることの意味は？
- ・ 大量埋納遺跡の存在
→荒神谷・加茂岩倉遺跡の圧倒的な量
一極集中で、裾野が薄い。他に配布した形跡が見えない。（×印）
- ・ 武器形青銅器と銅鐸の同時埋納
→荒神谷・志谷奥遺跡（全国で7か所しか存在しない）
矛としては唯一。

＊地域的にも時期的にも限られた中で、盛行する。

→分布の仕方や扱われ方が、二大文化圏と明らかに異なる。

＊青銅器に対する意識（想い・願い・期待・価値観 etc.）が非常に高い。

→その背後に何があるのかはわからない。

2. 大量埋納の実態（加茂岩倉銅鐸の埋納状況復元）

①加茂岩倉遺跡の発見 1996年10月14日 農道工事中に発見

→工事停止となった段階で、かなりの数の銅鐸が元の位置に無かった。

確実に埋納状況のまま残ったもの：29（30）号・31（39）号 計4個

重機バケット内から回収されたもの：1～12号 計12個

掘り上げた排土に埋まっていたもの：35（36）号・32（33）号・37（38）号
計6個

斜面下に集められていたもの：13～28号 計16個

後に回収されたもの：34号 計1個 総計39個

②埋納坑内の痕跡 圧痕3箇所を確認

→5（6）号と号数不明の2鐸の位置が把握できる。

③入れ子の状況 すべての銅鐸が入れ子であったと考えられる。

→入れ子状態で残っていたもの、土や錆の状況から、15組（30個）の入れ子関係が判明。

残る9個のうち大型の5個の内面には入れ子の痕跡あり。

④埋納姿勢 横倒しで鰭を立てた状態。ただし、やや山側へ倒れる傾向あり。

→原位置の銅鐸は東西を向いている。

重機の歯が銅鐸に直交するようにあたっている。

＊すべての銅鐸が東西方向に並んでいた。

大型の銅鐸は、鈕が西向き：9個、鈕が東向き：11個（報告書）

ただし、姿勢の角度はばらつきがあり、8:12かもしれないし10:10かもしれない。

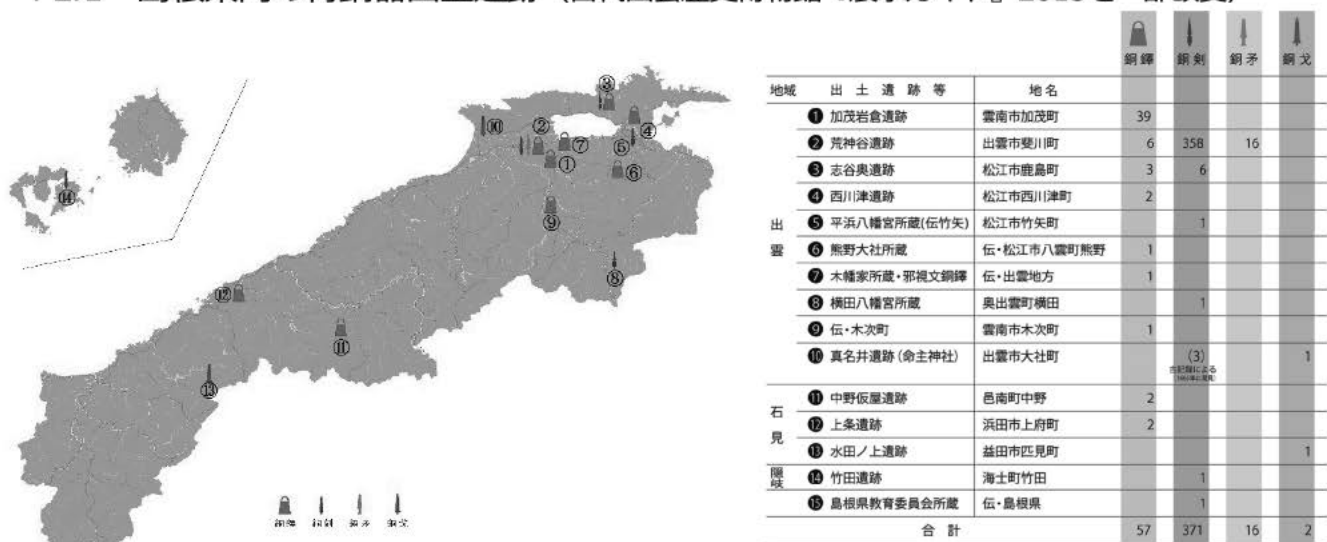
⑤埋納坑のサイズ 原位置の銅鐸は、隙間なく埋められている。

→1m×2m程度の穴にかなりタイトに並べられていた。

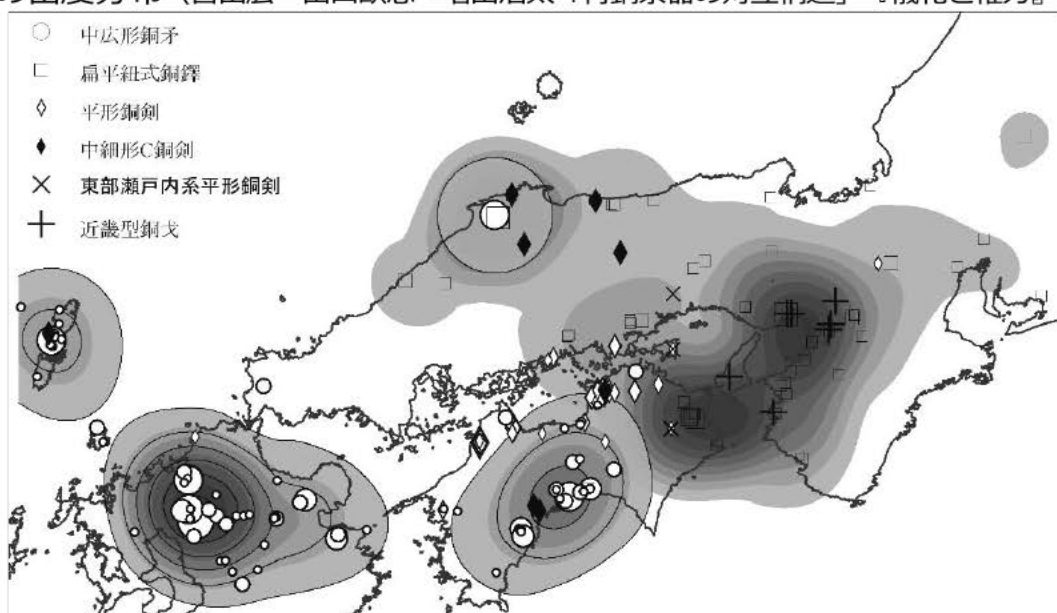
⑥不明な点

- ・各銅鐸の正しい配置と入れ子関係
- ・埋納された季節・時間帯
- ・小型銅鐸が不足する件

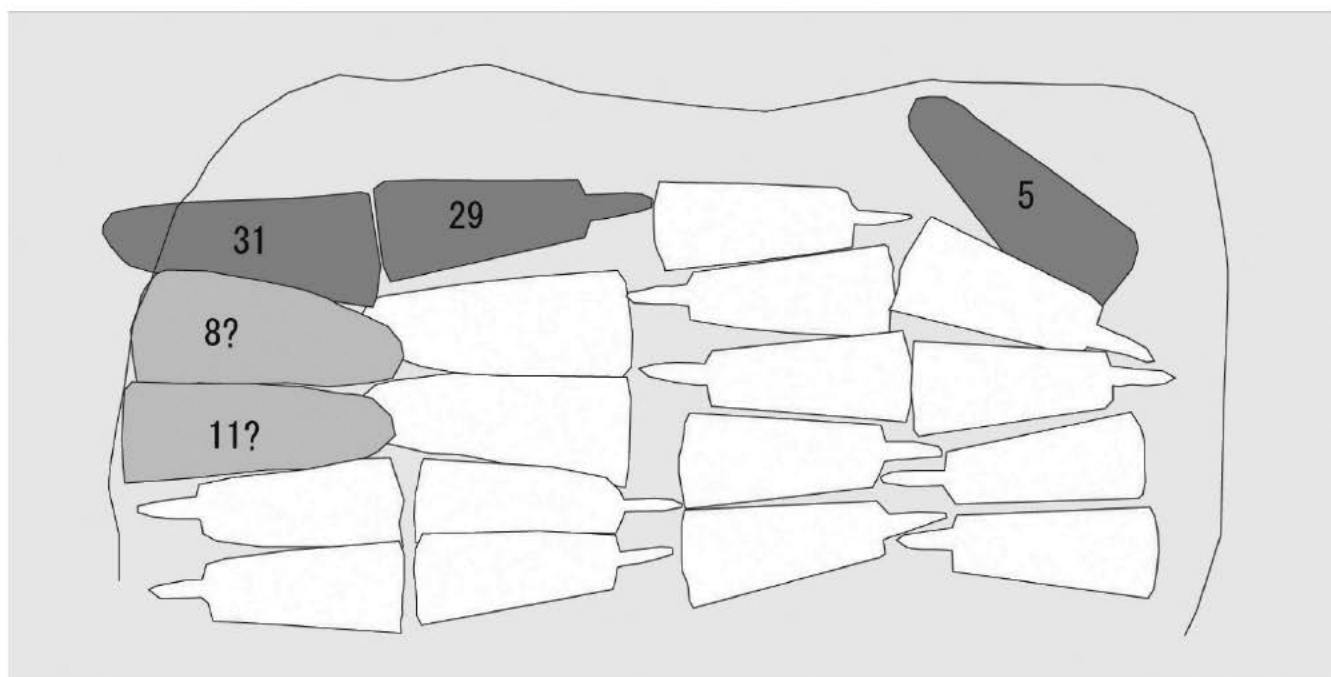
PL.1 島根県内の青銅器出土遺跡（古代出雲歴史博物館『展示ガイド』2013を一部改変）

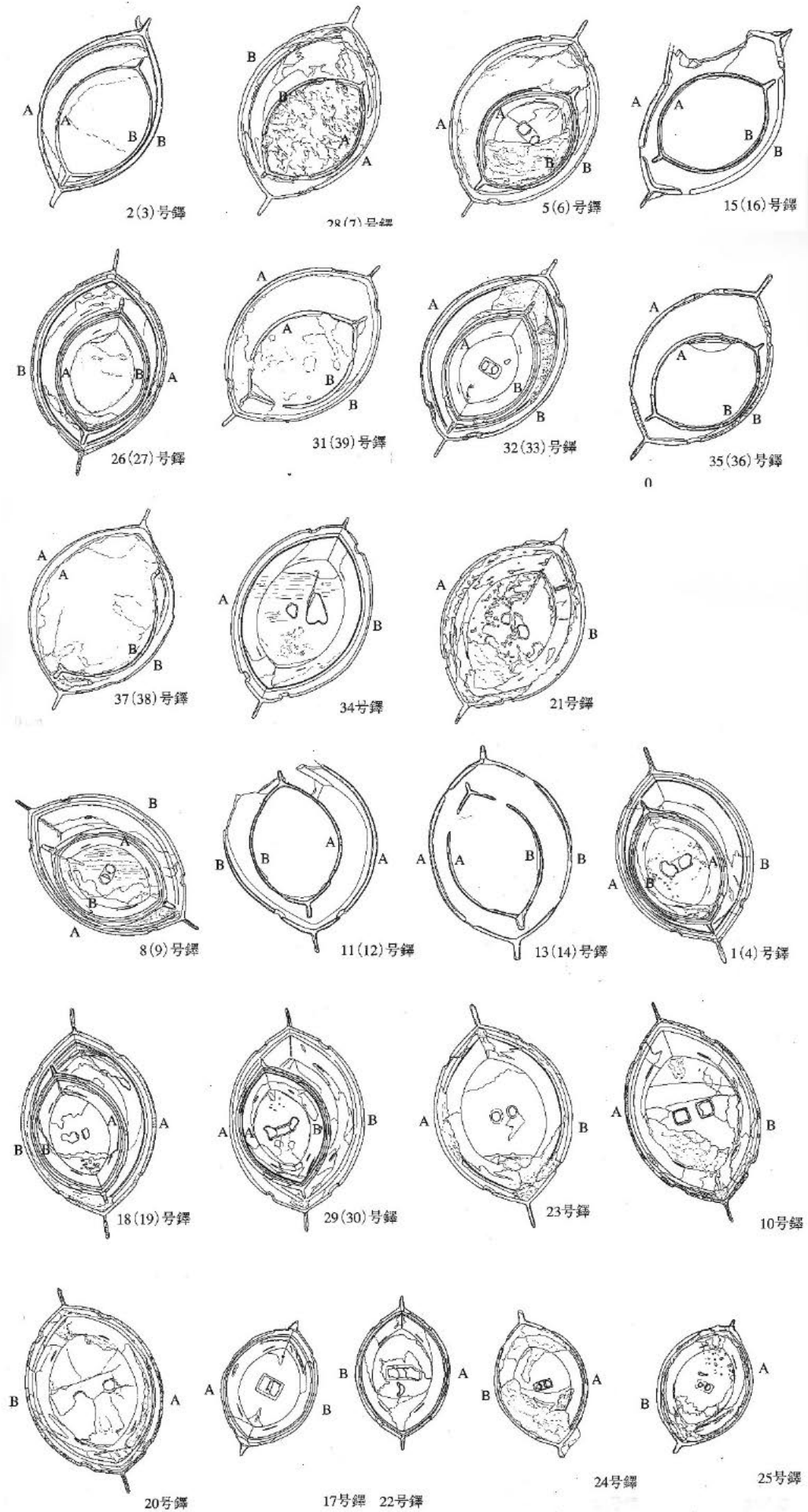


PL.2 青銅器の密度分布（吉田広・山口欧志・増田浩太「青銅祭器の対立構造」『儀礼と権力』2008同成社）



PL.3 加茂岩倉銅鐸の想定配置





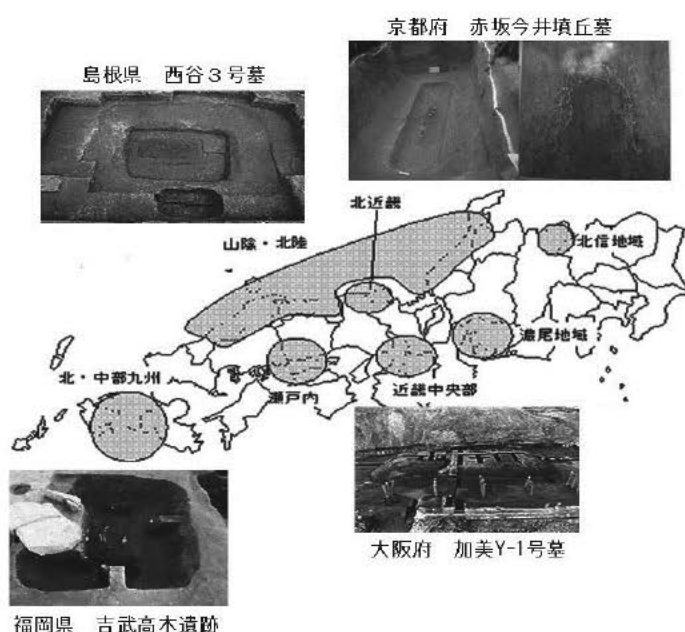
第5講「日本海文化としての出雲の古墳時代—考古学から見た地域王国論—」

東京国立博物館 調査研究課長
河野 一隆

日本列島の交流史では瀬戸内交流と並んで日本海交流が大きな役割を果たしている。日本海岸は潟湖が発達し、縄文時代以来、近隣交易を生業とする拠点的な集落が登場した。弥生時代以降には対外交易の機能が加わり、外部威信を表象した奢侈品つまり威信財が流入する。その交換ネットワークによって階層的関係が形成されると、擬制的で族縁的な社会組織が生み出される。そして特定個人に仮託された威信は、埋葬儀礼の中で破壊されることにより組織の平衡が保たれる。やがて競争的に繰り返された儀礼は王権のイデオロギーとして社会に組み込まれ、「地域王国(王権)」と呼びうるような構造が確立する。この発表では、瀬戸内に比べて可耕地が少ない日本海側での王権形成のプロセスをあとづける。

1. 日本列島の特定個人墓のあゆみ

日本列島に大陸から渡来した副葬品を持つ特定個人墓が成立するのは弥生時代前期(福岡市吉武高木遺跡)のことである。佐賀県吉野ヶ里町の吉野ヶ里墳丘墓が登場する中期以降、副葬品の質的・量的な格差が顕著となる。北部九州では、福岡県春日市須玖岡本遺跡、同飯塚市立岩遺跡で中国鏡・鉄製武器・農工具・ガラス玉などが甕棺に納められた。弥生時代後期には、墳丘が大型化すると同時に、北近畿では多量のガラス玉や鉄製武器を副葬する土壙木棺墓が、山陰地域では貼石を持つ四隅突出墓、瀬戸内地域の双方中円形の墳丘墓など地域性が発現し、多様な展開を見せる。弥生時代前期から前方後円墳が成立するまでの個性豊かな特定個人墓の展開を図示すると第1図のようになる。古墳時代には奈良盆地に前方後円墳が登場して墳形・副葬品内容が斉一化し、近畿地方中部を中心に前方後円墳を頂点とする階層的構成が形成される。古墳時代中期には周濠を持つ巨大前方後円墳が大坂平野に登場することで頂点に達し、以降、横穴式石室の採用と共に前方後円墳の規模は減少してゆく。しかし出雲では前方後円墳が首長墓として比較的遅くまで採用される。このような弥生墳丘墓・古墳の造営活動を維持したものは弥生時代を通じて地域間交流の基盤となっていた鉄・玉・貝の道である。



第1図 弥生時代前～後期の墳丘墓の個性

2. 鉄・玉・貝の道

鉄 弥生時代早～前期に九州に登場する鉄器は、遅くとも弥生時代前期末に丹後半島まで達する。小片や明確な利器の形をとるものが少なく、共伴遺物さえ明らかで無い例が多いが、中国・戦国時代の鋳造鉄器を再利用したものがほとんどである。弥生時代の初期鉄器文化は、精錬・鍛冶もままならず、石

核から剥片を作出するように鉄製利器が作り出された。大型で複雑な製品は不可能で、弥生時代中期には鉄製武器や工具が墓や集落から出土するため、鍛冶を駆使した鉄器生産も行われた。集落遺跡では三角形や棒状の微細鉄片が検出された鍛冶炉もある。中国大陸や朝鮮半島からの舶載鉄器を素材とし加熱加工された。京都府京丹後市の奈具岡遺跡は水晶と緑色凝灰岩の玉作遺跡であるが、ここから近畿地方でも屈指の量の鉄片が出土した。その多くが玉加工のための工具で铸铁脱炭鋼である。舶載鉄器のスクラップを集積し、現場で加工された。ここでは鉄器が農工具のような生産用利器ではなく、玉という奢侈品を生産するために特化して使われている。鳥取県北栄町西高江遺跡や島根県松江市平所遺跡でも同様で、鉄器文化が玉生産とセットで波及することも日本海岸の弥生文化の特徴のひとつである。

玉 縄文時代とは異なり朝鮮半島から渡来した弥生時代の玉文化は、山陰（鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡）に発祥し、中期には碧玉や緑色凝灰岩が産出する日本海側を主に玉作が行われる。また碧玉とは異なる技術体系で水晶製玉作も出現し、西日本で拠点的に行われた。弥生時代の玉作遺跡が明確でなかった九州でも、福岡市西新町

遺跡や糸島市潤地頭給遺跡で確認された。特に後者は花仙山産の碧玉が搬入され、水晶製玉類も生産されており製作技法も出雲玉作と共通する。弥生時代に成立した日本海岸の玉と鉄を威信財の基軸としたネットワークは外部資源（鉄）を威信財（玉）の生産に転化し、弥生時代後期になって四隅突出型墳丘墓や方形台状墓などの厚葬墓をいち早く成立させた。このメカニズムは弥生時代だけでなく古墳時代にも受け継がれる（第2図）。外部威信は中国王朝に加え朝鮮半島諸国の比重が高まるけれど、列島内では地域間関係が共鳴しあい、首長墓系譜に裏付けられた墳丘と規模によって規定される埋葬法の文化が発達した。この世界的に見ても墳墓様式の多様

	海外		日本列島			
			近畿中央	西日本	九州	
3世紀	魏		大和東南部			
4世紀	金官伽耶		大和北部	越(松岡)丹後	日向大隅	
5世紀	新羅大伽耶	百舌鳥・古市		吉備丹波若狭	筑後・有明海・氷川流域	
6世紀	百済新羅	百舌鳥・古市	大和南部	越(三国)出雲	古賀宗像	
7世紀	百済		大和南部		壱岐	

第2図 弥生～飛鳥時代の地域間関係と対外交流

性において類の無い古墳文化を支えたものは、縄文時代以来、形成されたソトとウチを区別する意識である。日本古代史で古くから指摘された「外政を内政に転化する」構造を物象化したものが特定個人のために造営されたモニュメント、つまり巨大な墳丘とそこで展開した埋葬儀礼であった。

貝 威信財交換のネットワーク網にのって、はるか南島から貝製腕輪が北上する。ゴホウラ、イモガイ、オオツタノハなどから加工された貝輪は、島根県平田市猪目洞窟遺跡や京都府与謝野町大風呂南遺跡、福井市龍ヶ岡古墳などの墳墓・古墳を通じて、北海道の伊達市有珠モシリ遺跡にまで達する。また、石川県加賀市片山津玉作遺跡などでは、古墳時代になって腕輪型石製品が生産され、畿内にいったん集積された後、同心円的に再分配される。このような弥生～古墳時代における南海産貝輪の波及は、海上他界観の浸透と無関係ではない。日本の国土をイザナギ・イザナミの二神が形作ったとする「国生み神話」をはじめ、島に神が宿るとする神体島の観念は、南島のニライカナイの信仰に繋がっている。

3. 日本神話に埋め込まれた日本海文化

ニライカナイは一種の他界観だが、南島には伊平屋島・伊是名島のような神体島と沖縄県南城市斎場御嶽のような天岩戸の信仰が存在した。柳田國男が指摘した「海上の道」に見る基層的構造である。神体島信仰は、古墳文化圏内では福岡県宗像・沖ノ島、三重県神島、岡山県大飛島などが挙げられ、島内部に古墳は築かれず、島を望む港津にモニュメントとしての古墳が造営される。生と死を分けるのが海であるという水平他界観に基づいている。一方、天岩戸神話と構造的に類似するのが黄泉国神話である。それぞれ扉によって昼と夜、生と死とが区切られる点が共通する。黄泉国は黄泉比良坂を下った場所にあり垂直他界観から生まれている。しかもその構造は玄室（死者の世界）を板石（千引大石）で閉塞する九州系横穴式石室そのものである。言い換えれば黄泉国神話誕生の地は九州系横穴式石室が普及した地域であり、大和や河内などの畿内型横穴式石室が導入された地域ではない。神話の中に九州系の要素が組み込まれていることは、冒頭の「国生み」からも明らかで、イザナギ・イザナミ二柱の神が生んだ島を地図上にドットしてみれば、玄界灘を中心に東端は淡路島にいたる瀬戸内に広がっていることが分かる。以上から、日本神話に出雲が登場する以前に玄界灘神話とも言うべき隠された神話群が想定される。以上を図式的に纏めると、「①玄界灘神話：国生み・黄泉国・天の岩戸 → ②出雲神話：八俣大蛇・常世国・国譲り → ③日向神話（大和＝大王の神話）：海幸山幸・天孫降臨・神武東征」となる。この構造から読み取れるのは、玄界灘神話が解体され出雲神話と接着し、日向神話で大王権の正統性を説明するという不整合である。それでは、このような構造がいつ、どこで生じたのだろうか。その可能性が高いのは玉・鉄・貝の道が形成された弥生時代後期の日本海岸地域である。外部威信を表象する財の交換ネットワークが他界観の複合化を加速させ、複雑な神話の大系を生み出したのではなかろうか。

海を介した交流で結ばれたイデオロギー的な結合は、擬制的な社会組織にも帰結している（第3図）。2017年に世界文化遺産へ登録された福岡県の宗像・沖ノ島は、国家祭祀としての性格を有し、地元の豪族である宗像氏が祭祀を奉斎した。九州北部の一豪族が政権中央と繋がってなぜ国家祭祀を担えたのか。日本神話では宗像氏が祀るのは、タゴリヒメ、タギツヒメ、イチキシマヒメといった宗像三神とされている。

宗像氏と出雲系氏族と賀茂氏との関係

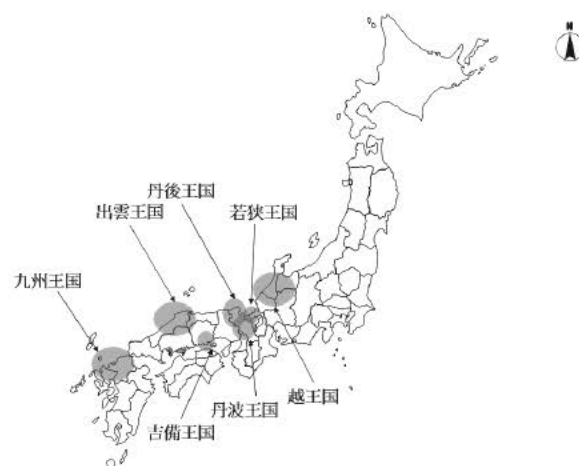
九州	出雲	近畿
宗像氏—奥津嶋比売命—伊和大神（大国主命）		
宗像氏—多紀理毘売	—阿遲鋤高日子根命	—賀茂氏

第3図 九州・出雲・近畿をつなぐ氏族

この宗像三神は、アマテラスとスサノオとのウケヒで、アマテラスの武器によってスサノオが産んだとされている。スサノオは出雲と縁の深い神であり、宗像氏と出雲との縁が感じられる。さらに、『新撰姓氏録』には宗像氏の祖はオオクニヌシとされており、『播磨国風土記』には播磨西部のオオクニヌシと同一視された伊和大神とイチキシマヒメとの婚姻記事が記録されており（「託賀郡条黒田里」）、出雲と宗像は強い結びつきがあったと推定される。ところで、オオクニヌシを祖とする氏族には宗像氏以外に賀茂氏が挙げられる。天孫系の賀茂氏は大和の葛城にもと居た氏族で、岡田賀茂を經由して木津川を遡上し、葛野から鴨川沿いに京都盆地を遡上したと考えられている。さらに葛野には桂川の治水（葛野大堰）で名を馳せた秦氏がおり、京都盆地の中では周辺氏族と強い結びつきを持っている。秦氏は朝鮮半島からの渡来系氏族で、新羅との結びつきが強い。再び宗像・沖ノ島の祭祀遺跡に戻ると、半岩陰・半露天祭祀以降に新羅や中国の文物が奉斎され、岩上祭祀とはその性格をがらりと変える。つまり、弥生時代からの九州・出雲・大和の繋がりには古墳時代以降も命脈を保っていた。このように見てくると、古墳文化とは後の畿内に繋がる地域を中心として同心円的に波及するのではなく、「日本海文化」という基層的な纏まりとその核の一つである出雲、その両端に位置する大和と九州という構造で捉えられるべきである。

4. 地域王国（王朝）論の再評価

以上のように考えると、かつて喧伝された「出雲王国」など地域王国（王朝）論との課題整理が必要だろう。提唱者である門脇禎二によれば地域王国論の特質は次のように規定される。①沖積平野の河川と交通路を掌握する農業共同体を構成した家父長家族の自立的成長により内部矛盾が激化、②共同体を総括的に統一する個人は、公共事業を展開して生産力の上昇をはかり、交流を強化、③武人を加えた原初的な官僚群が生成し、税物を貢納させ再分配する構造を備える、④この支配体制は共同体個々を越えて適用される一般法を強化した。そのメルクマールに①地域における王権とその支配体制、②確定された支配領域、③独自の文化や支配イデオロギーを挙げている。本論が提唱された当時は、日本の古代国家を専制的国家と見る、戦後歴史学以来の枠組みがあり、それに対抗する「分散的国家」による国家形成過程の再評価に重きが置かれていた。ところが近年では、古墳時代をヤマト中心の統一的政体と見ることは低調で、首長制から一歩進んだ分散的だが国家的構成を備えた「初期国家」と見るのが主潮となっている。「国家形成期」への評価が高まる今、40年近く前に提唱された地域王国（王朝）論にもっと光を当てても良いように思う。ところで地域王国とされた場所を地図上にドットすると（第4図）、「丹後王国」や「出雲王国」をはじめ、日本海岸に偏っていることに気付かされる。これは「地域国家（王朝）論」の提唱を通じて見た日本海岸諸地域における弥生～古墳時代にかけての政体の成長過程が、広大な沖積平野の灌漑水利の掌握を原動力とした、戦後歴史学として受け継がれてきた日本古代国家論の枠組みでは捉えきれなかったことを、いみじくも示唆していたのではなかろうか。



第4図 地域王国（王朝）論

本論が提唱された当時は、日本の古代国家を専制的国家と見る、戦後歴史学以来の枠組みがあり、それに対抗する「分散的国家」による国家形成過程の再評価に重きが置かれていた。ところが近年では、古墳時代をヤマト中心の統一的政体と見ることは低調で、首長制から一歩進んだ分散的だが国家的構成を備えた「初期国家」と見るのが主潮となっている。「国家形成期」への評価が高まる今、40年近く前に提唱された地域王国（王朝）論にもっと光を当てても良いように思う。ところで地域王国とされた場所を地図上にドットすると（第4図）、「丹後王国」や「出雲王国」をはじめ、日本海岸に偏っていることに気付かされる。これは「地域国家（王朝）論」の提唱を通じて見た日本海岸諸地域における弥生～古墳時代にかけての政体の成長過程が、広大な沖積平野の灌漑水利の掌握を原動力とした、戦後歴史学として受け継がれてきた日本古代国家論の枠組みでは捉えきれなかったことを、いみじくも示唆していたのではなかろうか。

本発表では、特別展「出雲と大和」の開催にあたり、二極を対立的に捉えるのではなく、九州北部をも加えた三極を持つ、日本海文化という面の相互交流として捉えるべきことをあらためて強調したい。

第6講「出雲大社巨大本殿と古代出雲世界」

島根県古代文化センター 専門研究員
松尾 充晶

1. 神話が語る大社創建 ～国譲りと“顕幽分治”～

(イ) 国譲りの代償としての大社創建

A.『古事記』国譲り神話

▼大国主神は、葦原中国を天つ神の御子に献上することを承諾する代わりに、天皇の宮殿に匹敵するよ
うな立派な「住所」の建設を要求。

B.『出雲国風土記』天平5年(733) 出雲郡杵築郷条

▼天下所造大神(=大国主神)の宮を建設するため、諸々の皇神たちが地面を突き固め(きづき)な
ったのでキヅキという、という地名起源説話。出雲郡の神社条筆頭に「杵築大社」。

C.『日本書紀』第9段正文

▼大己貴神は国を平定した広矛を使者の神に授け、目に見えない世界(八十隅)に隠れてしまう。

(ロ)「顕」と「幽」

A.『日本書紀』第9段一書第二

▼「(国の献上を拒絶した大己貴神に対して高皇産靈尊は)「汝が言うことはもつともである。そこで一
つ一つについて勅をしよう。汝が治らず顕露之事は、吾が天孫が治める。汝は神事を治らせ。また、
汝が住むべき立派な天日隅宮を造営しよう。」これに答えて大己貴神は「天神の仰せは懇切です。命に
従わないことがありますでしょうか。私が治らず顕露事は皇孫がお治めください。私は退いて幽事を治
らしましょう。」と申して永久にお隠れになった。」

B.顕幽分治の解釈

▼『神代卷口訣』忌部正通 貞治6年(1367)

天皇に政治権力だけを譲り渡し、祭祀権は引き続き大国主神が保った、という理解

☞その後の言説に影響し、一部現代に至る ⇔「祭政一致の天皇権」と矛盾するという問題点

▼『日本書紀纂疏』一条兼良 康生年間(1455~57)

政事と祭祀はひとつで「顕」を構成し、いずれも天皇に受け持たれる。大国主神はそれまで地上
で有していたすべての権限「祭・政」を天皇に譲り渡し、代わってそれとは全く違った領域での
支配者となった、と説く。

C.その後の顕幽論と“出雲観”

▼『古事記伝』『玉くしげ』本居宣長(1730~1801)

顕露事：現人の顕に行ふ事(人事)、朝廷の万の御政

幽事：顕に目にも見えず、誰為すともなく、神の為したまふ政

☞「顕」を包括する「幽」の本源性 幽事を支配する大国主神の重要性を説く。

▼『霊の真柱』『古史伝』平田篤胤(1776~1843)

「幽冥」：死後に靈魂が赴く大国主神が主宰する無窮の世界、とする。人は生前(寓世：かりのよ)、

「顕」を支配する天皇の下にあるが、死後の靈魂は幽冥界(真の世界)で永遠に大国主神の支配
を受ける。 ☞幕末~明治の神学に大きく影響

2. 出雲大社の造営史

(イ) 天皇を咎める出雲大神の宮

A.『古事記』垂仁天皇条

- ▼「物が言えない皇子、本牟智和氣御子^{ほむちわけのみこ}を案じた垂仁天皇の夢に出雲大神が現れ、「わが宮を天皇の御舎のように建てれば、必ずや皇子は話せるようになるだろう」と諭す。出雲に派遣し大神を拝ませると、皇子は言葉を発した。天皇は喜んで菟上王を派遣し出雲大神の宮を造らせた。」
- “神代に国譲りの代償としての造営が約束された” ことが前提にある伝承

B.『日本書紀』齊明天皇 5 年条

- ▼齊明天皇 4 年 (658) 5 月条 物言えぬ皇孫建王^{たけるのみこ}が 8 歳で薨去、悲嘆する天皇
- 同 5 年 (659) 是歳条 「出雲国造に命せて、神の宮^{つくりよ}を修葺^{おののこほり}はしむ。狐、於友郡^{おののこほり}の役丁の執れる葛の末を嚙ひ断ちて去ぬ。又、狗、死人の手臂を言屋社^{いふやのやしろ}に嚙ひ置けり。天子の崩りまさむ兆なり。」
- 同 7 年 7 月 天皇崩御 ⇨ 天皇の身边に障りを及ぼす出雲大神に対する畏怖と対応した大社造営

(ロ) 平安時代の造営

A.高層神殿を語るもの

- ▼『口遊』天禄元年 (970) 源為憲 「大屋の誦」「雲太・和二・京三」=高層建築ベスト 3 の暗誦句として「出雲大社本殿・東大寺大仏殿・平安京大極殿」⇨当時の東大寺大仏殿は高さ 15 丈 (約 45 ㍎) と伝えられる (『延暦僧録』) ことから、それ以上の高さで推定される。
- ▼『杵築大社旧記御遷宮次第』康応 3 年 (1391) (鰐淵寺旧蔵文書)
- 「杵築大社三二丈ト申ハ仁王十二代景行天皇ノ御時御造立也 其後十六丈ニナリ 次ニ八丈ニナリ 今ハ四丈五尺也」
- ▼『太子伝玉林追加抄』文安 5 年 (1448) 頃
- 「本処に式々に造らば大社の背ろに八かり山とて三十六丈の山あり、其のたけにつくるべし」
- ⇨正式な本殿は 36 丈 (約 109 ㍎) に造営するべき、という認識を示すもの
- ▼寂蓮法師 (1139? ~ 1202) (『夫木集』所収)
- 「出雲の大社に詣でて見侍ければ、あまくもたなびく山の中ばまで、かたそぎの見えけるなん、此世の事ともおぼえざりける やはらぐる 光や空に満ちぬらん 雲に分け入る ちぎの片そぎ」

B.国家的事業であった平安時代の大社造営

- ▼康治元年(1142)在庁官人解状
- 出雲大社「天下無双の大廈、國中第一の靈神」「顛倒の時、宣旨にあらざれば造営を始むることなし」
- =宣旨 (天皇の命令) がなければ造営に着手できない
- ▼一国平均役 (朝廷の命を受けた国司が出雲国内の荘園一同に命じて造営用材木等を負担させるシステム) による造営 ⇨出雲国を代表する神社として「出雲大社」の呼称あらわれる

C.遷宮造営史 ~繰り返す正殿「御顛倒」~

- ▼本殿 (正殿) の老朽化に応じ、地元の国大工が仮殿を造営→祭神を仮殿へ遷座→官人の実検
- 正殿解体=「御顛倒」→宣旨を経て朝廷官人 (木工寮) 大工主導で正殿を造営→正殿へ遷宮
- ▼平安時代の造替
- ③弘仁 13 年 (822) 仮殿造営/遷宮?
- ④永延元年 (987) 遷宮
- ・長元 4 年 (1031) 顛倒 …「無風顛倒」国司重任を企図した虚偽、佐渡へ配流
- ⑤長元 9 年 (1036) 正殿遷宮
- ・康平 3 年 (1060) 仮殿遷宮 → ・康平 4 年 (1061) 顛倒
- ⑥治暦 3 年 (1067) 正殿遷宮
- ・嘉承元年 (1106) 官使下着し実検 → ・天仁元年 (1108) 顛倒

- ⑦永久3年(1115) 正殿遷宮 ※稻佐浦に大木百支が流れ着く「寄木造営」
 ・保延5年(1139) 仮殿遷宮 → ・保延7年(1141) 顛倒
 ⑧久安元年(1145) 正殿遷宮
 ・承安元年(1171) 仮殿遷宮 → ・承安2年(1172) 顛倒
 ⑨建久元年(1190) 正殿遷宮
 ・嘉禄3年(1227) 仮殿遷宮 → ・嘉禎元年(1235) 顛倒
 ⑩宝治2年(1248) 正殿遷宮
 ・文永7年(1270) 火災 ☞この後、縮小した「仮殿造(仮殿式)本殿」に
 ⑪弘安5年(1282) 遷宮(仮殿造)

▼「虫食ひの託宣」…御殿柱に“過大な社殿は我が意ではない”との文字が虫食いであらわれたとの伝
 ☞⑨建久度から⑩宝治度造営の間に、用材となる大木の確保が困難になり、本殿規模が縮小したことを示すという理解。

3. 巨大本殿の顕現

(イ)「^{かなわのごどうえいさしず}金輪御造営差図」と三本束ね柱

A.「金輪御造営差図」

- ▼出雲大社本殿の古図とされ、出雲大社宮司を代々継承する出雲国造千家家に伝わる。
 ▼内殿や階段(引橋)位置は現在の出雲大社本殿とも共通する。棟持柱が外側に張り出す点は「大社造」の古い特徴を示す。
 ▼9箇所(箇所)の柱の内側にはそれぞれ、3つの小さな丸が表現されている
 ☞柱材3本を抱き合わせて、「金輪」で束ねた状態を表現したものか。
 ▼それぞれの柱には「柱ロ一丈」(＝柱径約3^{ふた}尺)と書き込みがあり、巨大な柱であることが表現される。
 ▼図上では模式化されるが、階段部には「引橋長一町」(＝階段の長さ約109^{ふた}尺)と書き込みがある。
 ▼国造家の千家俊信(1764～1831)は、師事していた本居宣長にこの図を見せる。宣長は「心得ぬことのみ多かれど」(不審な点ばかり多い図だが・・・)と注記のうえ著作『玉勝間』に紹介、これが文化9年(1812)に出版され世に知られることとなった。

B.福山敏男氏の研究

- ▼京都大学教授で神社建築史研究の第一人者であった福山敏男氏(1905～1995)は、「金輪御造営差図」を、高さ16丈であった⑨建久度以前の出雲大社本殿を図示したものと考えた。

C.大林組による復元的考察

- ▼福山敏男氏の研究を前提に、建築技術の視点から3本束ね柱・高さ16丈の本殿建築の実際を復元的に試算。ビジュアル化された復元イラストは「出雲大社高層神殿」のイメージ醸成に影響を与えた。

(ロ) 出雲大社境内遺跡の発掘調査

A.発掘調査の経過

- ▼平成11年(1999)9月より、地下祭礼準備室の建設に先立つ発掘調査(事業主体:出雲大社)が実施される。中世の玉垣遺構や古墳時代の祭祀遺物が出土し、重要遺跡であることが判明したため平成12年(2000)3月、工事中止、遺跡の保存決定。
 ▼平成12年(2000)4月から内容確認調査を開始、10月までに3箇所の柱(宇豆柱・心御柱・南東側柱)を確認、本殿跡の平面規模、配置を確定。翌年までに宇豆柱、心御柱を取り上げて発掘調査完了。

B.出土した巨大柱

- ▼スギの巨木(心御柱:直径123～140^{センチ}、宇豆柱:直径110～135^{センチ})3本を抱き合わせた掘立柱で、束ね柱の構造が「金輪御造営差図」と一致する。地中に埋め据えられた柱材基部のみが残存する。

常時地下水位の地下 1.3 ｍより上位は不規則に腐食している。

- ▼立柱前の儀礼に用いられた手斧 2 点や土師質土器（かわらけ類）が柱穴内から出土。
- ▼柱材の上面には多量の炭化材に混じり、鋳・带状金具・釘などの鉄製金具類が出土。本殿建築の廃絶に伴うものか。☞大型で重厚な带状金具は先端を尖らせて鋳状に柱材同士の緊結に使用されたもの＝「金輪」に相当。

C.本殿跡の評価

- ▼心御柱の柱直下に敷かれていた板材（礎板）が、年輪年代測定法により 1227（+α）年の伐採であることが判明。造営記録に照合すると、寛喜元年（1229）11 月の杣山始・木作始～宝治 2 年（1248）正殿遷宮された、⑩宝治度本殿跡である可能性が高い。柱材を試料とした炭素同位体年代測定法でも同結果が得られた。

（ハ）出雲大社 宝治度本殿の実像と歴史的意義

A.宝治度境内の絵図

- ▼『出雲大社并神郷図』出雲大社を中心に杵築郷と「神郷」領域を描いた絵図。中央の出雲大社は、本殿は大社造で赤く彩色され、急角度の階段が付く。宝治度以前（縮小化する前）の大型本殿が表現されているか。

B.“3 本束ね柱”に込められた意味

- ▼島根県立古代出雲歴史博物館の開館に際し、5 名の建築史研究者がそれぞれ、宝治度の本殿復元模型を作成。5 名のうち、浅川滋男氏（鳥取環境大学）と黒田龍二氏（神戸大学）の復元案は、「3 本束ねのうち 2 本を床の支持材とし、残る 1 本を床上まで立ち上げ身舎を作る」という要素が共通する。
→3 本束ねという特殊な柱構造の最も合理的な解釈。
- ☞大材確保を前提とする古代的造営が困難になった結果、創出された“最終形態”の大型本殿か。「金輪御造営差図」は「正殿式（正式な規模格式をもった大型の）本殿」を伝える指図として作成され、国造家の正統性を裏付ける遷宮旧記図面類のひとつとして伝承されたものか。

C.遡及する古代出雲大社の高層性

- ▼⑩宝治度は大規模本殿の造営維持が困難になり、建築が縮小する中世への過渡期にあたる（宝治度本殿は既に縮小化している、という見解もあり）。しかし、そのような状況でさえ、発掘されたように巨大な柱を駆使した大型本殿が建築されていた。
- ▼前述の浅川・黒田復元案ではこの時の本殿は高さが 42～45 ｍ程度。伝承された「高さ 16 丈（48）^ト」にも遜色ない規模である。⑨建久度（平安時代：12 世紀）以前の本殿が、さらに高大であったことを間接的に裏付ける。

4. 出雲と大和 ～古代王権と祭祀の源流～

- ▼出雲大社境内では、古墳時代前期後葉に滑石製玉類を用いた祭祀が開始。これは大和で滑石祭祀具が創出されたごく初期にあたり、全国的にも古い出現期のもの。
- ▼この頃で創出された新しい「出雲ブランド」の玉は、大和王権にとって重要なレガリアとしての位置を確立した。6 世紀には出雲が全国で唯一の玉産地となり、霊性を具えた玉を供給した。
- ▼対外交通の結節である出雲は「外なる世界との通交口」という地域像がもたれていた。
- ▼目に見えぬ世界との交渉を象徴する出雲国造は、大国主神の祭祀を司るとともに、「大国主神の御子神＝百八十神が鎮まる出雲」全体を統合する存在でもある。7 世紀後葉～8 世紀初頭には、天皇（国家）による統治の安定を大国主神＝ひいては出雲が保障する、という構造が完成していた。その点で、出雲と大和はまさに「幽」と「顕」という、古代国家の宇宙観を二分する存在だった、といえよう。

令和元年度
東京国立博物館連続講座
「出雲と大和」

発行日：令和 2 年 1 月 24 日
編集・発行：東京国立博物館
印刷：大協印刷株式会社

*本書の全部または一部を著者の許可なく転載・複製することを禁じます